『同志社文学』（第二次）をめぐって

河野仁昭

1

明治二十年三月に創刊され、同二十八年四月、第八十七号をもって終刊となった『同志社文学雑誌』（途中誌名に変更があり、第五十四号から『同志社文学』に定着した）は、一学校の教員と学生の手でつくられ、刊行が継続された雑誌であったこと、広義の文学雑誌[1]として、いわば総合雑誌的な性格をもちながら、狭義の文学の面でもある程度先駆的で啓蒙的な役割も果たしていること、東京ではなく京都で八年間にわたって発行され、しかも月刊を維持したことなどにおいて、十分記憶に値いするといってよかろう。[2]

この雑誌以前に発刊された同種のものをあげるとすれば、『東洋学芸雑誌』（明治14・10創刊）と『女学雑誌』（同18・7創刊）の二誌くらいではないかと思う。『反省会雑誌』が創刊されるのは明治二十年八月である。

明治二十年代のこの『同志社文学』を、便宜上第一次とよぶことにしたい。本稿で紹介と多少考察をこころみたいと思う第二次『同志社文学』は、明治三十六年三月に創刊され、同年十二月第四号を発行して終った。わずかに四冊刊行して自然廃刊のかたちになった。[3]それだけに、果たした役割もちいさかったし、従来ほとんど顧みられることもなかった。しかし、その存在がまったく知られていなかったわけではなくて、わたしが知るかぎりでは、同誌について最初に語った人は和田琳熊である。彼は昭和二年十二月創刊の第三次『同志社文学』（同志社大学英文学科文学会編集発行）第一号の「発刊の辞」に、次のように書いている。

「出なければならぬものは幾回蹉跌しても出るのです。（中略）わが英文学科の近年の発展は、法学部に『法学論叢』が神学部に『基

督教研究』が確実な歩を進めて居る今日、何時までも沈黙を守ることを許さないのです。量よりも質といふ主義で、教授学生諸君の熱心な協力によって、今回第三回目の『同志社文学』が其創刊号を出すことになりました。（中略）英文学科内に何処となく、今度こそはといふ気持が漂ふて居るのは何を語って居るのでしゃうか」

おそらく第三次『同志社文学』は、法学会の機関誌『同志社論叢』（大正9・3創刊、その前身となる『政治学経済学論叢』は前年二月創刊）や、同志社大学神学科内基督教研究会の『基督教研究』（大正12・11創刊）に刺激されて発行されることになったのであろう。当時、神学科は文学部に属していたから、文学部関係では二冊の機関誌をもつことになった。

ところで、右の第三次『同志社文学』の「編集後記」には、明治初期に「第一次『同志社文学』の幾冊を見る事が出来る。降って大正の初、『芸術境』の真摯な努力とその天才的な夭折は未だ吾々の記憶に古くない」と、『芸術境』という雑誌（筆者は未見）をあたかも第二次『同志社文学』であるかのように書いている。④

和田はおそらく、「編集後記」とおなじ意味あいで、「第三回目」と書いたのではなかろう。同誌を編集発行した同志社大学英文学科文学会の幹事であり代表者（文学部長であった）である彼は、第二次『同志社文学』を編集発行した同志会（第三号より同志社文学会となる）の会長だったのだ。そして同誌の創刊号にも、事務的な文章ではない「発行之辞」を書いているのである。明治三年に生まれ、同三十三年四月に同志社教員になった和田は、当時三十歳をこえたばかりの少壮学者だった。まさかその第二次『同志社文学』の創刊と挫折を失念して、第三次の「発刊の辞」をかいたとは信じがたい。

和田琳熊の文章以外で目にとまったものは、永年明治期の英学関係の文献を丹念に渉猟してこられた重久篤太郎の論文「『同志社文学』の背景」（『主流』第十八号）だが、彼はただ一行、「第二期の『同志社文学』は明治三十六年に再刊されたのである」と書いているだけである。「再刊」といってよいかどうかについては考慮の余地があるであろう。第一次『同志社文学』廃刊後八年目に創刊した同志会のメンバーに、その意識があったかどうか疑わしいのである。ともあれ、もうひとつ目についたのは『同志社九十年小史』で、これもごく簡単に、「文学を広義に解する伝統（第一次の――河野注）は明治三十六（一九〇三）年の第二次『同志社文学』にもひきつがれたが、昭和二（一九二七）年の『同志社文学』からは、もっぱら英文学を中心とした文学研究および創作なども掲げ」と記しているのみである。『同志社五十年史』の「文芸」の項を担当した三輪源造は、第二次『同志社文学』については一言もふれていない。

以上がわたしの目についたもののほとんどすべてだが、明治三十

七年九月に学生生徒の手で創刊された新聞『同志社評論』について、高橋信司が後年、その紙面には文芸的な記事が多い「これは同紙が『同志社文学』の延長として発刊されたものなるを雄弁に物語るものである」⑤と指摘したのは、第一次を指しているのか第二次の延長だといっているのか、いずれとも判断しがたい。両者とも「文芸的な記事」が多かったからである。しかも『同志社文学』のみがそうであったのではなかったことについては後でふれる。

① 「文学」という言葉は、かなり広い学問領域を包括して用いられていた。たとえば、大槻文彦編『言海』（明治三十年代）では「㈠書ヲ読ミテ講究スル学芸。㈡又、語学、修辞学、史学等ノ一類ノ学ノ総称」と説明されている。㈠が狭義の「文学」であろうが、それでもなお今日の概念に比べてはるかに広い。

新島襄が「大学設立の旨意」（明治21・11）のなかで、「今まや我邦の青年ハ、皆な泰西の文学を修め、泰西の科学を修め」といったのは、あきらかに広義の「文学」である。

② 詳しくは同志社大学人文科学研究所編『人文科学』第一巻第二号参照。この号は『同志社文学』の文献的研究」特集である。

③ 第四号で終ったと認めうるのは、『同志社明治三十六年度報告』の「寄附」欄に、「同志社文学四冊」と記載があり、以後の『報告』には見当らないことによる。

④ 同志社創立六十周年記念『同志社校友著作目録』（同志社文学会編　昭和10・10）には、本稿でいう第二次の記載はなく、『同志社文学』大正六年十月発刊（後廃刊）、大正十四・五年頃発刊（後廃刊、謄写版）とあるが、両者とも筆者は未見。他の文献にもそれを裏付ける記録は見当らない。

大正六年五月に大学英文科学生が英文学会を組織し、定期的に「公会」をもち教員の講演や学生の研究発表をおこなった。その講演記録四篇をまとめて『英文学会講演集』を同年十二月に発行した。（『同志社時報』一四四号、一四九号参照）右の『目録』は、それを指しているのではないかと思われる。

『芸術境』は同志社文学社刊、大正十年六月創刊。右の英文学会と同志社文学社の関係については未調査。ただ、大正九年十二月四日に文学会が第九回目の講演会をおこなった記録がある（『同志社時報』一八三号）。これはプログラムからみて英文学会であろうと思われる。なお、大正十三年度末に、同志社大学英文学会の会員は約五十名という記録がみられる。（『同志社時報』二二八号）

⑤ 高橋信司「『同志社評論』とその時代」（『同志社時報』二四二号、大正15・6）

2

『同志社評論』（明治37・9創刊）の名がでたついでに、当時の同志社内の刊行物について簡単にふれておきたい。

第一次『同志社文学』廃刊後の刊行物で、内容がもっとも充実していた定期刊行物は、明治三十年二月に創刊され、一年に一ないし二冊づつ刊行をつづけ、同三十七年十二月に第十五号をもって廃刊した『校友会報』（同志社校友会発行）であろう。これは校友会の機関誌にはちがいないけれども、現在の“The Doshisha Times”と

ちがって七十〜八十ページの冊子（巻末に名簿を掲載）であるだけでなく、その発行の趣旨は、「校友会の生るる豈其れ他あらんや、此の際に当り、吾党相互の交情を温め、一致団結の実を挙げ内にしては同志社各学校の事業を助け、外にしては社会に於ける同志社の拡張を謀らんが為めのみ」（「校友会報発行の辞」『校友会報』第一号）といっているとおり、同志社の維持運営のみならず重要人事と密接にかかわりあっていた校友会の性格を如実に現わしていた。それだけでなく、「同志社校友会規約」に付記された「同志社トノ特約」によって、事務所および事務処理は同志社事務局をもってし、通信費その他雑費は同志社が負担した。

同『会報』が創刊された前年、同志社社員会（現在の理事会）は、信仰や宗教教育問題に端を発するトラブルの揚句、創立以来ふかい関係にあったアメリカン・ボードに対して独立を宣言し、外人宣教師は全員同志社を去り、同志社は国内外有志の援助によって維持運営をはからざるを得ないという窮地に立ったのである。[1] 従って校友会の一致団結とその援助を、同志社は切実に必要としていた。さらに、第一次『同志社文学』は、論説や、毎号掲載する「記事」（五十四号より「雑報」、六十九号より「同志社彙報」と改められる）欄などで、学内の行事や諸問題を詳細に読者つまり校友に伝えていた。おそらく当時はこれが、学内のニュースを校友に伝達する唯一のメデイアであった。だから、同誌の廃刊はそのメデイアの喪失にほかならなかったから、同志社と校友会幹部は、別のメデイアを案出する必要に迫られていたのである。[2]

他にも事情はあったろうが、そうして創刊された『校友会報』も、アメリカン・ボードとの問題がいちおう解決し、また、徴兵猶予の特典をえて入学志望者を増加せしめるために、新島襄存命時代に「不易ノ原則ニシテ決シテ動カス可ラズ」（「同志社通則」第六条）と明記した条項を削除し、キリスト教を徳育の基本とするという原則の適用除外の学校をも経営していることを文部省に印象づけるよう第二条の末尾の、同志社諸学校には「悉ク本社ノ通則ヲ適用ス」という部分を削除した問題（訓令第十二号により、宗校教育を行なう学校には徴兵猶予の特典は与えられなかった）にともなう紛糾（横井時雄社長および全社員が総辞職した）[3] も一段落して以後、その内容は号を重ねるに従っておだやかになり、徐々に校友相互および同志社と校友のサロン的雰囲気を濃くするようになった。それにともなって、講演会記録や新体詩、和歌など文芸に割くスペースが多くなる。それだけでなく、記事の文体そのものも文芸的性格を帯びてくるのである。たとえば、

「塩を嘗む。物価の騰貴した割に食料は一日拾五銭即ち月に四円五拾銭……明治二十年頃の倍であるが……である為め、発達盛りの

青年には、飯ばかり七八椀やりても未た物足らぬかして、饂飩屋、菓子屋の繁昌大方ならずとの事なり、うたかたの浮世と方丈記の作者ならねとも、栄枯盛衰のことはりに感する次第なるか、為に彰栄館の前なる木村といふ家に菓子食ひに行き慣れたる一人の若者ありけり、菓子を食ひては到底学資か足らぬより、断然木村行きを廃せんと思ひ立ちたれとも、久しき習慣は中々改め難くやありけん遂に一策を按し賄方より塩を求め来り、菓子を思ふ毎に塩を嘗めて、遂に克己の効を奏せりといふ」（『校友会報』第十二号）

などその最たるもので、小説のひきうつしではないかといぶかしく思われるほどである。しかも、このような文体の記事が、さほど異質の感じをあたえないのである。おそらく多くの記事は、多少筆のたつ学生生徒にかかせたものと思われる。実際問題として、彼らの手をかりなければ、当時の数名の同志社事務局職員の手は、『校友会報』の編集発行まではまわらなかったにちがいない。

右の『校友会報』に類したものに、明治二十七年一月に創刊され、毎年一、二冊づつ発行をつづけた『同志社女学校期報』（九号より『女学校期報』と改題）があった。[4]

それ以外に、同志社基督教青年会が発行していた機関誌があったようで、三輪源造は『同志社五十年史』のなかで、「青年会雑誌の発行は明治三十一年で、当時同志社唯一の基督教鼓吹の刊行物で、途中玲瓏と改題して相当長く続いて居る」とかいている。[5] その他に、当時はガリ版がまだなくて、原稿を合綴したような手書きの雑誌が何冊かあったようで、『校友会報』（第十二号）に次のような記事がみられる。「図書館には大抵二種類位の生徒間より発兌する例の筆記の雑誌かある、其中には其表紙の意匠なと美事にして、同志社内にもかかる美術心のあるものか居るかと或る人を驚かしむる位であるが、筆記した雑誌では満足か出来ぬ所より、遂に同志社文学の発刊となった、校友会報と合併せばとの説もあれど、未た熟するに至らぬ、とも角、其永続して愈発達せんことをいのる」

活版刷の『同志社文学』は、当時としては目立つ存在だったのである。雑誌ではないが、おなじころ、さきの青年会主催の「文芸会」と称する行事が毎年秋、神学館二階の講堂などでおこなわれ、なかなか盛況だったようである。いわゆる学芸会のようなものであったのだろうが、出し物は小説の朗読や新体詩の朗吟、英語劇の暗唱などで、年によっては女学校の生徒も観客として参加したようである。[6] いずれにせよ、当時の同志社の文学熱はなかなかたかかったようであり、青年会その他に熱心なリーダーもいたのである。

① 青山霞村著『同志社五十年裏面史』（からすき社 昭和6・7刊）、『校友会報』一、二号など参照。

② 『同志社文学』のその機能は、後の『同志社新聞』『同志社時報』が継

承する。むしろ、それを第一目的とする学校の機関紙になってゆく。

③ 青山霞村著　前掲書、日本組合教会編『日本組合教会史』（未定編）大正十三年九月刊など参照。

④ 宮沢正典編『「同志社女学校期報」総目次』参照。

⑤ どのような雑誌であったか筆者は未見。なお、同青年会は同志社教会とは直接的な関係はなく、後にＹＭＣＡに移行する学生の団体であると思われる。

⑥ 『同志社新聞』第四号（明治37・11・15）など参照。

3

第二次『同志社文学』を編集発行したのは同志会という団体で、その会長は、当時同志社普通学校教頭であった和田琳熊であったことは先にふれた。会長以外の役員構成は次のとおりである。①

編輯員　江口信行　岸田美郎　小池幸太郎　加賀美昂　芥川光蔵　平泉郁哉　柳井辰二　山口実　石村鹿太郎

庶務会計　砂川貞男　村沢直綱　横井五郎八　組谷定次郎　吉田清吉　玉井辰三郎　野田為憲

以上の顔ぶれをみると、ほとんどみな同志社の学生生徒で、ただ、編輯員には高等学部文科学校および神学校の在学生が多く、庶務会計には普通学校の生徒が多いというちがいは認められるが、『校友会名簿』その他で調べた限りでは、ほとんど学生生徒のみである。

そして、編輯兼発行名義人は第一号から四号まで江口信行（明治三十七年高等学部文科学校卒業）になっている。

同志会はまた、「一方に於て文筆を以て起つと同時に他方に於て弁舌を揮はんが為めに毎月一回乃至二回の演説会を開くことせり」②と事業についてうたっており、その第一回演説会を二月二十七日③の夜、公会堂（現在の中学校チャペル）で開いている。演題と弁士は次のとおりである。

吾国道徳の衰頽と其振起策　井上　竹治
海国青年の本領　藤谷　哲玄
渓谷を出でて春色を見る　坂本　芳治
敢て諸君に訴ふ　小池幸太郎
同志会の設立を祝す　平松斧太郎
校を愛するの心　荒木　良造
健児の声　岸田　美郎
奮起せよ真個の文士　江口　信行

同志会の結成と、雑誌発刊の宣伝も兼ねての演説会だったのであろうが、ここでもその顔ぶれはほとんど学生生徒ばかりである。ところが、同年十月十六、十七両日にわたって四条教会で行なわれた同志社文学会公開講演会④になると、

第一回（十月十六日）

高安　月郊　社会的文学的に維新の革命を観る
笹森宇一郎　ハムレットの美的原理

第二回（十月十七日）

高安　月郊　東西の演劇を比較して国民の趣味に及ぶ
笹森宇一郎　ウオータルロー古戦場の感慨
薄田　泣菫　韻文朗読

となっていて、学生生徒は見当らない。高安月郊（三郎）は同年四月に詩歌句集『春雪集』を上梓し、東京でも知られている気鋭の文人であり、笹森はたまたま同志社教会の招聘で長崎から上洛して滞在中であった。泣菫は新進の詩人である。これは公開講演会なので学生の弁士は出なかったことも考えられるが、第一回演説会のような顔ぶれで、それを継続したという記録は見当らない。一回で中絶したとは考えがたいけれども、後述する『同志社文学』の執筆者の顔ぶれの変化とも考えあわせて、同志会にとってはかなり重要な意味あいをもっていたのではないかと推測される。

ともあれ、会の結成および雑誌創刊当初は、おそらく学生生徒中心の会であり雑誌たらしめようと意気込んでいたに相違ないのである。ただ、それにしては若干疑問を感じるのは、第一号の「雑報」欄に、「校友会員より（地方）[5]本会へ申込みありたるもの三月二日迄に百五十一名なりき」とあり（明治三十五年度までの男子校の卒業生総数は七二六名）、さらに、入会申込用紙に「種々の注意を書き添へ」てあったとのことで、注意書を分類すると、次の七項目に分けられるなどと書かれている点である。

㈠校友会は消滅するや。
㈡校友会と合併すべし。
㈢思想の狭隘に陥らざる様に勉むべし。
㈣如恁事業には金の必要ある為め義捐金を募れ。
㈤毎月発行しては何如。
㈥集金者選定すべし。
㈦校友会を改良すべく交渉すべし。

会長が普通学校教頭であれ、実質的には学生生徒の組織であり雑誌であったとすれば、校友会員より「百五十一名」もの入会申込みがあったことや、右のような意見を寄せてきたという事実は、どうも解せないのである。しかも、雑誌の印刷所も『校友会報』とおなじ大阪市の岡本光塩堂になっている。

卒業生に対してどのような内容の文書を送って入会を勧誘したのか、残念ながらその文書は見るべくもないし、『校友会報』にもそれらしい記事は一行も記されていない。ただ、第一次『同志社文学』の末期の編集者であった橋本奇策が創刊号に「同志社文学の再興を祝す」という次のような文章を寄せているので、わずかにその趣旨、

内容をうかがい知ることができるのみである。

「第五回内国観業博覧会の開会に先つ前三日一片の端書は編輯局なる生の机上に舞ひ来れり採りて之を見れば同志社文学再興の檄文なり。（中略）

曩に編輯を担当せし敏腕なる中瀬古君の豊富なる学識を具へて再び同志社に来るあり其他有為の青年諸子のあるあり今日こそ該雑誌をして再興せしむるに最も時機の適せるものなりと思意せしに恰もよし今回再興の挙ある報に接せり生の喜躍豈偶然ならんや」

中瀬古君とは、断わるまでもなく同志社教員中瀬古六郎である。彼は科学者であったが、第一次『同志社文学』には創刊号からかかわりあった人であり、後に『同志社五十年史』の編纂主幹もつとめた人である。

右の橋本の文章によると、入会勧誘は校友にはがきでおこなわれ、「同志社文学再興」を訴えたもののようである。「再興」となれば八年間つづいた第一次の関係者や読者にアッピールするところがあったであろうことは想像にかたくない。和田はもちろん中瀬古も「檄文」に名を連ね、校友の支持を呼びかけたのではないかと思う。校友の全面的な援助がなければ、学生生徒だけの手で活版刷の雑誌など出すべくもなかったはずである。学生委員の名はあげられていなかったのではないか、もしあげてあれば、創刊号にあらためて氏名を列記することもないのではないかと思う。学校からは、おそらく補助金は出なかったはずである。アメリカン・ボードとの対立や、「同志社通則」改正問題こそいちおう解決したとはいえ、同志社の財政状態は決して安定してはいなかった。『同志社明治三十五年度報告』によると、同志社男子校の学生生徒数は、同年度で入学者二三一名に対して退学者一七二名、卒業者はわずか二十三名で、年度末在籍者数二九六名に過ぎない。三十七年度でも入学者二三九名、退学者一六〇名、卒業者二十六名、年度末在籍者数三五九名である。（『同志社明治三十七年度報告』）それでも明治三十三年度の在籍者数一八一名にくらべれば、徐々に増加しつつはあった。（それまでにもっとも在籍者が多かったのは明治二十三年度の六九三名である）財政状態推して知るべしであろう。

明治三十七年九月に学生生徒の手で機関紙『同志社評論』（第三号から『同志社新聞』と改題）が発刊されたが、最初は学生のポケット・マニーと広告費でまかなわれており、三号あたりから、理事その他の役員にも配りたいから届けて欲しい、多少なら学校も援助してもよいと下村孝太郎社長は語っている（『同志社評論』号外、明治37・9・25発行）。援助といっても、実質的には買い上げ程度のことだったものと思われる。当時は『学報』や『校友会報』のようなものはともかく、学校が教員の研究紀要のような雑誌を出すこ

とさえ、全国的に皆無にひとしかったから、あながち財政問題だけが理由のすべてではなかったろう。ましてや学生生徒の雑誌に多額の援助をするといったケースは、どこにもなかったろう。『学友会誌』のようなものに校費が使われるのは、大正中期から昭和初期あたり以降ではないかと思う。校費といっても、それは、学生が納入する学友会費が当てられたのである。

ともあれ、そうして発刊をみた第二次『同志社文学』の巻頭に、和田琳熊はつぎのような「発刊之辞」を掲げている。会長である和田の抱負とみてよいだろう。

「現今思想界の勢力たる者二、曰く説教、曰く文章。宗教家の思想は主として説教に現はれ、学者の思想は主として文章に彰はる。（中略）願くは文筆をして天地の真理を発揮せしめよ、宇宙の美妙を歌はしめよ、而して正義に反する剣と軍艦とをして其前に屈せしめよ。

翻て我国の文学を見るに、読むに足るべき者なきに非ずと雖、徒らに世に媚びんとする無主義無節操の文学は日々前途多望の青年を腐敗せしめつゝあるなり、健全高潔なる文学は須らく取て之に代るべきなり。（中略）健在なれ我党の青年。悲む者は来て此紙面に泣け。喜ぶ者は其文壇に歌へ。而して健全なる思想を以て紙面を蓋はしめよ。

同志社文学散りて、相国寺畔風寒く、思想の花開かざること十年。今や一陽来復、霞鬱びき鳥歌ふ明治三十六年の春、再び咲き出でたる同志社文学の花一輪。驚て首を挙れば、万朶将に綻ばんとする吉野山の桜」

長い引用になってしまったが、和田は文章の後に小さい活字（八ポ）で、「本会に篤き同情を寄せられたる校友会員諸君に申上候諸君の熱心なる歓迎は生等に於て百万の援兵を送られし心地致候」といった謝辞をかき添えている。

「発刊之辞」にみられるとおり、和田は第一次『同志社文学』の後をうけて、同誌を旗幟鮮明な主義、思想の表現の舞台とするとともに、「健全高潔なる文学」の発表あるいは育成の場とすることを願っていた。狭義の文学だけの雑誌にする意思はなかったようであり、それは学生生徒の意向でもあったと思われる。うつ勃たる発表欲、表現欲をもつ学生生徒の熱意に動かされ、また、明治三十一年に東京帝大を卒業して、三十三年三月末まで東京の小学校英語科教員伝習所の講師をつとめていた和田は、中央の学生たちの関心やジャーナリズムの動向についても体験的に承知しており、淋しい京都の同志社教員として感ずるところもあって、生え抜きの同志社人ではなく、しかも就職して僅か三カ年にしかならないにもかかわらず会長の任をひきうけ、校友との折衝の労もとったのではないか。文

飾がやや過剰気味の「発刊之辞」は、彼自身の意欲のあらわれとみられぬでもない。「経験乏しき乳臭の生等文学衰微の後を受て始て呱々の声を挙げたる者」であって、到底「諸君の意に満つる能はざる者」であろうが、進歩の初段と思って失望されないようにと校友に対して懇請している。「発刊之辞」とはうって変った低姿勢ぶりであるが、おそらくそれも和田の本音であったろう。ただ、彼はひとことも、この雑誌とそれを発行する会は学生生徒のものであるとは断っていない。むしろ逆に、「我帝国を基督教化せんとの大抱負を以て生れ出でたる同志社も、今は二十有七年の歴史を有するに至りぬ。当に自ら準備する所あるべきなり」と、「発刊之辞」では同志社そのものを前面に押し出している。

だが、「檄文」の内容どおり、発刊される雑誌はかつての『同志社文学』の「再興」だと素朴にうけとって入会した校友が多ければ多いほど、和田の願望や同志会の学生生徒の熱情は、支持者の期待を裏切って徐々に離反を招くか、支持者の意向に妥協して自己矛盾をひきおこすか、やや極論のきらいはあるが、そのいずれかの方向をたどらざるをえない宿命にあった。局外にある支持者の期待は性急であり、しかも、当事者が予想するほどには情状は斟酌してくれないのである。第一次『同志社文学』の廃刊から八年の歳月がたっていた。さきの文章に橋本奇策がかいているように、「出版事業の最も旺盛を極めつつある時代」になって来ており、大阪毎日新聞社の編輯局にいた彼でなくても、雑誌その他の刊行物が物珍しい時代は、とっくに終っていた。そして詩歌は新体詩から近代詩や新興短歌へ移りつつあり、小説は自然主義理論にもとづく作品が世に出ようとしていた。評論で幸徳秋水の『社会主義神髄』、片山潜の『我社会主義』などが刊行されたのは明治三十六年であり、硯友社をひきいていた作家の尾崎紅葉は、この年に亡くなっている。

過去の見はてぬ夢を若者に託すとすれば、託されるほうが迷惑であり、かといって新しくおこりつつある文学や思想のパイオニアであるためには、出版ジャーナリズムはすでに東京へ集中していた。ユニークな個性的な雑誌を生み出すことは、今日と同様至難の事業であったといわねばならないだろう。

①『同志社文学』第一号「雑報」欄。「本学年間本会の役員は左の如し」とあるが、六月卒業者を除いて、四号まで大きな異動はなかったものと思われる。

ちなみに、『校友会報』第十三号（明治36・12）の「青年会記事」によると、同年一月に総会を開いて役員を改選しているが、その顔ぶれは、〈幹事〉関原喜代松　〈書記〉秋保藤助　〈会計〉平松斧太郎。以上のほか同年度に新設された委員会と委員は、〈伝道隊員〉吉田清太郎、山口金作、岸田美郎　〈個人伝道隊員〉平松斧太郎　〈雑誌部委員〉江口信行、小池幸太郎、芥川光蔵　〈音楽部委員〉砂川貞男、村沢在綱となっていて、同志会の委員とかなり重複している。当時は青年会がもっと

も有力な学生団体であったものと思われる。なお、この年、同会の会員は、三十名程度から八十四名に増加している。

② 同右。

③ 何月か明記されていないが、記事が過去形になっていることから察して、創刊号がでる前の月、二月であろう。

④ 『同志社文学』第四号「洛北だより」。

⑤ カッコ内の「地方」の意味不詳。

4

創刊号の内容は、「論説」「詞藻」「講話」「雑録」「雑報」の五つのセクションに分けられていて（本稿末尾の総目次参照）、めぼしい評論は「論説」欄に、詩歌など文芸作品は「詞藻」欄にまとめるという編集をしている。

「論説」欄のなかで注目されてよい文章は、SY生①「ゾラの劇詩論」であろう。ゾラについては、すでに明治二十年前後から森鷗外などによってわが国に紹介されており、英訳によって田山花袋や山田美妙、尾崎紅葉らはその作品に早くから接していた。そして三十年代になると内田魯庵などがさかんに翻訳紹介し、ゾラに共鳴する作家や評論家があらわれる。初期自然主義作家ともいうべき小杉天外、小栗風葉らのゾラに学んだと思われる小説が世に出るようになって、明治三十年代中葉のわが国の文壇は、いわばゾライズム流行の観を呈した。ただし、わが国の自然主義文学は、それ以後ゾラの理論や作品の性格とは別の方向をたどった。

ともあれ、SY生が右のエッセイを書いた頃は、ゾライズム流行の時代だったから、それにうながされたものだといわれても仕方がない。ただ、興味ふかく思われるのは、彼が、ゾラの自然主義小説や文学理論ではなくて、晩年の『四福音書』つまり自然主義を脱して理想主義に移って以後の作品に着目し、ゾラがなぜそういう方向に転じたかについて考察をめぐらしている点である。SY生はつぎのように推論する。ゾラは科学的精神による観察試験の方法を用いて小説をかいた。そして、その創造的努力は、現実の「罪悪の七面相」、「百鬼夜行の醜画」を描かしめた。しかし、現実はたしかに不完全ではあるけれども、彼が描いたほど暗黒惨憺たる世界ではない。ゾラは少壮の鋭気に駆られて自然主義を主張したが、美を追求する芸術家にほかならぬ彼は、「終身現実の内に踟躕し、此処に其の居を定めんことは到底彼のなし得可からざる処なり、其の晩年に至りて四福音書を構想し、円満なる未来の理想的社会を夢想せしは、蓋しゾラの本色ならんか」と、SY生はいうのである。芸術家は美の女神の追求者である、ゾラは芸術家である、従って彼は、という単純な三段論法が理論の根底にあることがあまりにも見え透いており、『四福音書』に転ずる以前に道徳的な面などから非難攻撃され

ていたことや、彼の弟子であるモーパッサンなどが注目を浴びつつあったことなどにもSY生は言及していない。しかし、当時のゾライズムの流行にもかかわらず、『四福音書』こそゾラの「本色」だという見解は、SY生の思想的倫理的態度をうかがわせて興味ぶかく思われる。彼は新しい文芸思潮のよい理解者でも、ましてやその推進者でもなかったかも知れないが、流行によってまどわされることのない学究的良識をもっていたことは確かなようである。

興味ふかく思われるもう一篇のエッセイは、小池烏川の[2]「趣味の教育と小説」である。人格教育は「杓子定規なる教育主義乾燥無味なる倫理教育」によって達成しうるものではない。西洋諸国の家庭における聖書の感化、ギリシア語の練習による趣味の啓発が行なわれないわが国では、教育家は小説を悪魔の如く考え、小説を読むことを罪悪のように言う。しかし、「人生学を最も巧妙に且具体的に表はしたるもの是れ即ち小説なる事を知らば先づ是まで抱き来りし偏見を去りて進んで如何にして小説を最もよく利用すべきかを研究するは教育家のまさに勉むべき急務にあらずや」と、小池はいう。ただ、小説群は玉石混合だから年少者には適当な監督者が必要だろうが、小説を読むことを禁ずる必要はないと、小説の教育的価値を力説するのである。

その理論は緻密さに欠けているし、理論の妥当性についても問題はあろうが、小説に対する教育者の偏見を批判した文章として読めば痛快であり、また、「小説に対する趣味の修練も亦必らずや小説其物より始めざるべからず」といった文学教育観は、一考に値いするといってよいだろう。彼はさらにキリスト教伝道者と小説の問題にも言及して、バイブルを読むだけではなく「人事の詩なる小説をひもときて社会と人間の作用を覚り以て卿等が主の福音を伝ふる素を作る」ことに何故努めないのかと問いかけている。多少暴論のきらいがないではないが、いかにも小説を溺愛する若者らしい立論がほほえましく、キリスト教主義学校の学生生徒たちの雑誌ならではという感じがする。

雑誌のほぼ半分のスペースを占める「詞藻」欄の文芸作品は、翻訳、新体詩、劇詩、短歌、俳句など百花撩乱だが、際立った作品は見当らない。すでに早く北村透谷や島崎藤村らの『文学界』があったし、三十年代に入ってからは商業雑誌が幾種類かでている。そして短歌や俳句は『ほととぎす』、『明星』などが斯界の注目を浴びていた。そうした文芸雑誌その他に発表された作品と比較してみると、一地方の同人雑誌という感じをまぬがれないし、藤村のエピゴーネンといわれても仕方がないような作品も見受けられる。すべてペンネームばかりだが、おそらく学生生徒の習作であろう。ただ、高安月郊の「新島先生紀念の歌」という新体詩が載っていて、これは例

外だが、明治三十六年一月二十三日の新島先生記念日に、公会堂で女学生によって歌われたものであることが、作品とともに『校友会報』第十二号の記事にでている。同『会報』からの転載である。

「講話」および「雑録」欄には講演の抄録と学生生徒のものらしい小論文や随想が集められているが、「論説」欄の文章ほど重量感のあるものは見当らない。かといってまた、丹念に練りあげた文章や、才気や斬新さを感じさせるものもないといはねばならぬ。ただ、真面目に書かれたものであることだけは確かだが、習作と雑文の寄せ集めという感じはまぬがれない。

全体を見わたしてみて、この創刊号はおそらく、雑誌らしい体裁をととのえることが精いっぱいの努力だったのであろうという印象をうける。その熱意だけは感じられる。遊びのようでいて、決して彼らは遊びでやっているのではないことが察せられる。文章も編集も、大真面目なのである。「本号は創業の際なるに非常に編輯を急きたるを以て紙面の体裁排置（ママ）等頗る蕪雑なるを免れず次号よりは充分材料を精撰して以て益々本誌が同志社の機関雑誌たるに恥ぢざるに勉むべし」と、巻末の原稿および寄附金募集のページに書かれている。学生生徒の寄稿者はたくさんいたようで、締切間際に多く原稿が寄せられたので、次号にまわしたものがかなりあるとも書かれている。

それはともかく、彼らが「同志社の機関雑誌たるに恥ぢ」ないものにしたいと述べていることは注目に値いするだろう。むろん公認されていたわけではなかったろうが、そういう意気込みが同志会の委員たちにはあり、校友に対してもおそらくそれに近い趣旨を公表してきたにちがいない。なお、おなじページに「本会の規則は目下起草中会員名簿と共に次号に記載すべし」と書かれているところをみると、会則も未定のまま校友有志にはたらきかけ、創刊号をだしたもののようである。

第二号は五月十日に刊行されたはずだが、残念ながら目下その現物はもちろんのこと目次さえ見出すことができない。ただ、第三号に田村作次郎の「支那文明の特徴に就きて（承前）」と、ス・ナ生「同志社文学第二号紫瀾生の遠航記を読みて同志社漕艇界の健児に寄語す」の二篇が掲載されているので、わずかにその一端をうかがい知ることができるのみである。田村の文章にはあとで若干ふれる予定だが、ス・ナ生の文章は、往年の元気がみられなくなった同志社漕艇界を慨嘆し、苦言を呈したものだ。要するに、第二号にはスポーツ関係の文章も掲載されたのである。

さて、第三号は十月十日に発行され、この号から発行所が同志社内同志社文学会に変っている。第二号が見当らないにもかかわらず、この号からというのは、奥付に同志社内同志会と印刷してから、そ

の上へ同志社文学会と印刷した紙片を張って訂正しているからだ。サイズもA5からB5に改めている。わずか四十ページばかりだが、雑誌らしい体裁がととのってきていて、創刊号のような蕪雑さはなく、内容が整理されてすっきりしたものになっている。長編新体詩二篇（飛天夢弓、③倉沢惣太郎）、講演記録一篇（厳本善治）、文学論二篇（田村作次郎、山口金作）など、いちおう力作をそろえている。

夢弓の詩「夕初秋の宮苑に立ちて」は、初秋のたそがれどきの御所に立って、流れる雲に王朝の雅やかな行列などを想像し、一千余年の歴史のうねりに想いを馳せながら、「小なる我が霊何処に行かん？」と問い、「哲学と美術と宗教の／極致を融して体せる姿こそ」自分の永遠の理想だとうたっている。なかなか野心的な叙事詩ではあるが、観念になんら具象性があたえられていない部分や、古歌をそのまま借用したような部分が混在しているなど、詩としては十分こなれていないし、純一性にも欠ける。おなじ号の巻末に、彼は箴言集のような「評論」を掲載しているが、哲学的な思索を好んだ人のようで、詩人としての情感や想像力はむしろ乏しかったのではないかと思う。

厳本善治の「江戸城明渡しの真相――西郷南州と勝海舟――」は、同志社基督教青年会の招聘でおこなわれた講演記録の全文である。厳本は明治三十二年に『海舟余波』を公刊して海舟をはじめ幕末の史実に詳しい人であっただけに、読み物としても興味ふかい。それだけでなく、歴史はしばしば勝者に都合のよいように書かれがちなので、何が真実であるかについて十分注意を払わねばならぬといった史観をのべている点など、抄録ではおそらく削除されたであろうと思われるような部分も含まれていて、第三号の圧巻である。ちなみに、彼が主宰していた『女学雑誌』（明治三十七年二月廃刊）には、同志社出身者はしばしば寄稿の機会をあたえられたが、厳本自身は第一次『同志社文学』にはまったく執筆していないようだ。講演記録とはいえ、同志社関係の出版物にははじめての寄稿である。

「支那文明の特徴に就きて」の続篇を寄せている田村作次郎は同志社教員で、当時は「物理学」「数学」のほかに「英文学」を担当していた。東洋史や中国文化については専門外だったようであり、また、「沙翁の悲劇マクベスに就きて」を同号に掲載している山口金作は、「歴史」担当の教員である。当時はまだ狭く専門分野を限定して深く考究するといった研究態度をとる者は少なかった、だから専門外だといってしまってはならないかも知れない。田村は中国文明と西欧文明を比較しながら、中国文明の根底にある特徴的なものは、「天下泰平主義即ち国家的閑静主義と隆礼主義即ち内面的解脱に反し外面的調整を旨とするもの」と「点綴主義」とでもいうべき特性と、以上三点だといっている。「点綴主義」というのは、中

国の言語は「緻密なる観念上の関係を現すべき附着性の辞に乏し」い、そうしたことばの特性から中国文化の特徴の一面を帰納的にとらえて名づけた語である。

山口金作は著名な『マクベス』を分析しながら、主人公マクベスと、彼をそそのかしたマクベス夫人両者に対して、深い理解と共感を表明して、「人の情一たび利欲念に充たさるるや全く理性を失ひ、近親の王をさへ殺害するに至る、而かも人は遂に利欲を追ふ、獣たり能はず、本心に苦しめられ、妄想に襲はるるなり」[4]と、人間の本性そのものの矛盾とその悲劇性を指摘している。内なる矛盾、相反するものの共存がときとして『マクベス』のような悲劇を生むので、山口はこの劇をたんなるフィクションとしてはみないで、「吾人はマクベスにあらざるも又マクベスたり得るの情性を有するものなり」と、彼自身および人間一般の問題として身近に引き寄せて『マクベス』を論じている。彼は後に『史的耶蘇』、『平安基督教会史』など、キリスト教関係の著書をかなり多数刊行しているが文学論はみられない。

他の文章にはふれるいとまがないが、ぜひ指摘しておかねばならないと思われる点は、関原喜代松という学生が北海道道会議員倉沢惣太郎の長編新体詩「四季の択捉」を推薦して掲載している以外に、学生生徒の文章は一篇も見当らないことである。第二号には少なくとも創刊号に掲載できなかった学生生徒の文章が載っていたはずである。ただ、巻末の雑報「洛北だより」は学生の文章だろう。

第四号は明治三十六年十二月二十八日に発行されている。体裁、内容とも第三号に酷似していて、『同志社文学』のパターンが決った感がある。ただ、この号には創作は一篇も収録されておらず、評論六篇と翻訳一篇だけである。巻頭の高安月郊「文学的社会的に維新の革命を観る」[5]は、明治維新を一大ドラマにみたてて叙述したもので、第三号の厳本善治の講演記録につづいて、幕末から明治初年にかけての歴史的読み物が掲げられているのは編集者の好みかも知れない。高安の文章は、四題の講演の中から選んだ記録だからである。ただ、厳本の講演記録に比べて平板で、人物も生きていない。

藤井倒扇[6]の「宇津保物語」は、同誌にとってはじめての国文学研究論文で、藤井は「材量と思想とに於て」多くのものを『源氏物語』は『宇津保物語』に負っている点を指摘し、『源氏』研究のためにも従来あまり顧みられなかった『宇津保』を研究する必要があることを強調した後、同書の書誌学的な問題に言及している。

第一次『同志社文学』にさかんに寄稿した湯浅吉郎も、同号に「同志社に於る新体詩の起源」を寄せている。彼が直接的な影響をこうむった山崎為徳と池袋清風を追懐した軽いエッセイだが、同志社の明治十年代の文学活動の一端がうかがえて興味ふかい。「山崎

君は常に英詩の名句を暗誦せられしが、かのミルトンの失楽園の第一巻のごとき、一句ものこらず暗記して、いつも相国寺畔の松蔭を朗吟しつゝ散歩せられしなり」といった一節など、夭逝した英才山崎の一面をうかがわせるし、清風の和歌の指導ぶりなども吉郎のこの文章以外に、直接指導をうけた人が書いたものはないはずである。

第四号のなかで、もっとも力のこもった論文は、当時「宗教哲学」と「倫理」を担当していた日野真澄の「論語に於ける孔子の神々」である。彼は海外留学中に儒教研究の必要性を感じて、「孔子の思想を体系的に研究せんと努めたる結果を英文」で綴った、その一部を略述するものだと冒頭で断っている。比較神学とでもいうべき領域の研究だろうか。日野は「孔子は三種の神々の存在を許したりしが如し、即ち第一、死せる人々の霊魂即ち鬼第二自然界の神即ち天神地祇及び第三至高神即ち天是なりとす」といってから、その三種の神々について、孔子の文章および弟子たちの注などをふんだんに引用しながら、具体的実証的に論証したもので、説得力のある論文である。研究論文としてのきめの細かさと論理性を備えている点では、第二次『同志社文学』のなかで随一のものだ。ただ、残念ながら儒学についてはまったくの門外漢である筆者は、この論文について批評する知的力量がない。

さて、この号の裏表紙の裏面には、はじめて「同志社文学会略則」が掲載されている。それは、全文次のような簡単なものである。

一、本会を同志社文学会と称す
一、本会は隔月一回雑誌『同志社文学』を発行す
一、本会々員を分ちて特別会員通常会員とす
一、特別会員とは同志社校友会員及び同志社に関係あるものを以てす
一、通常会員とは同志社各学校生徒を以てす
一、会員は総て会費を納むる義務のあるものとす
一、同志社文学は会員の詩歌文章を輯載す
　時に名士の寄稿を乞ふて載する事あるべし

以上七項目である。この号を編集する時点ではじめて成文化されたものか否かは詳らかでないが、第三号に掲載されていないことから察して、ようやく成文をみるにいたったのであろう。会費の額については明記されていないが、第三、四号の巻末に「会費を送られし諸君」として、氏名と金額が掲載されているのをみると、五十銭から二円までまちまちであり一円がもっとも多い。おそらく校友会費と同額程度であったものと思われる。さきにふれた趣意書には、当然明記されていたはずである。氏名があげられているのは、おそらく「特別会員」のみであろう。なお、同誌は創刊号以来「非売品」となっている。校友会同様、会員組織をとったからであろう。

右の「略則」に並べて、「投稿規則」五項目を掲げている。その第一項目に、「政治に亘る記事、風俗壊乱の慮あるものは厳禁す」とある。この規制は自発的なものなのか、発行許可の条件なのか、それとも教員の意思によるものかは明確にしがたい。

なお、各号の内容の紹介ではふれなかったが、毎号「雑報」（創刊号）、「洛北だより」（第三号以降）欄を設けて、学内の諸行事、校友の動静、同志社文学会の動きなどを、手紙のような候文で掲載している。第一次『同志社文学』の「同志社記事」を踏襲したものであろうし、校友である会員のために必要としたものでもあろう。第四号の「洛北だより」には、十月三十一日に逝去した片岡健吉校長の哀悼会および京都市民も参列していとなまれた追悼会の式次第が全文掲載されており、同号の巻頭には黒枠で、「吊同志社校長片岡健吉君　同志社文学会会員一同」として一ページを割いている。同志社の機関誌たらしめようという配慮がうかがえると言うべきだろうか。

① SY生は、同志社教員米田庄太郎であろう。彼は当時、「社会学」「統計学」「フランス語」を担当していた。フランス語ができたようだがフランス文学にはあまり詳しくなかったのか、「非文学者の文学論、聞たとて益なからんが、又害にならぬは売薬屋の広告にかけて保証する所なり」と、文章の中にかいている。現在いう心理学的社会学、歴史哲学関係の著述が多い。

② 本名不詳。明治三十六年度までの校友関係に小池姓は見当らないところから察して、明治三十八年に専門学校を卒業した小池幸太郎ではないかと思われる。

③ 本名不詳。『同志社時報』第二十二号（明治39・7・25発行）の「夏期附録」に、おなじペンネームで長編詩「解脱賦」を寄稿している。校友の一人だろう。

④ 「殺」の部分は欠字。おそらく「殺害」であろう。

⑤ 明治三十六年十月十六日に四条教会で行なわれた同志社文学会公開文学講演会の記録である。同号の「洛北だより」には「社会的文学的に……」とあり、本文の表題は「詩的社会的に……」となっている。

⑥ 明治三十六年四月に同志社女学校教員になった藤井寅一であろう。担当教科は「国語」と「漢文」であった。

5

漸く雑誌らしい体裁がととのい、号を追って内容の充実をみつつあったにもかかわらず、第二次『同志社文学』はなぜわずか四号という短命に終ったのか。発行期間も一年足らずである。明治三十六年三月には専門学校令が公布され、翌年三月同法令にもとづいて同志社専門学校を発足させ、経済科と文科をおき、神学校も専門学校同等の学校に昇格した。雑誌と直接の関係はないことかも知れないが、同志社も高等教育をほどこす学校らしい体裁をととのえ、組織的にも整備されるのである。

廃刊について推測しうる理由のひとつは、おそらく財政問題であ

る。第一次『同志社文学』の廃刊も、「その最大原因は矢張り同志社名物の財政難であると見て間違ひない」[1]と、三輪源造はかいている。第二次の場合、学校からの補助金はなかったであろうということはすでに書いたが、『校友会報』と同様非売品であった同誌は、会員の会費収入を唯一の財源としていたはずだが（広告も全く掲載されていない点でも『校友会報』とおなじである）、同誌に掲載されている会費納入者リストをみると、第三号では四十五円、第四号ではわずかに十五円二十銭にすぎない。これ以外に通常会員（学生生徒）の会費収入があったものと思われるが、それも右の金額より多かったとは考えられない。おなじ年に発行された『校友会報』第十二号（「名簿」を含めて約八十ページ）の印刷費は、七十一円五十銭である。[2]それと比較してみて、右の会費収入だけではおそらく発行困難だったにちがいなく思われる。

推測しうるいまひとつの理由は、学生生徒の文章が号を追って急速に減少し、第四号には一人も掲載されていないことである。にもかかわらず編輯兼発行名義人は江口信行（当時高等学部文科学生）であり、委員の顔ぶれは創刊号以来おそらくさほど変っていないはずである。彼らにしてみれば、同志会を結成して雑誌を創刊した当時の目的とあまりにも違ったものになって、ただ編集校正や郵送などの事務的な面でしかタッチできないのでは、雑誌の発行を続ける熱情はわかなかったにちがいないのだ。「文学会略則」の成文化がおくれたのは、右のような事情とおそらく無関係ではあるまいと思う。彼らは校友有志の援助に依存せざるを得ないかぎり、校友有志および顧問格の学内教員の意向を尊重しなければならなかったに相違ないのだ。学生生徒の同人雑誌の類のものに対して、援助を惜しまないような校友がそう多くいるとは考えられないし、ましてやそのような雑誌を出す会に入会する校友が多かろうはずはない。校友会費の徴収でさえ、決して容易ではなかったらしいのである。おそらく第一号に対しては会員から批判があったものと思われる。趣意書のイメージとは駆け離れたものだったのである。支持がえられるような雑誌にするためには、学内の教員や校友の文筆家の寄稿に頼らねばならなかった。「政治に亘る記事、風俗壊乱の虞あるもの」を厳禁した理由のひとつは、そういう類の文章を寄稿した学生生徒がおそらくいたからであり、特別会員と通常会員の投稿に差別を設けていないのは（「文学会略則」）、通常会員である学生生徒にも対等に門戸を開いておく必要性があったからだ。だが、結果的に通常会員のものは採用されなかったのである。もしもっとページを多くする財政的余裕があったならば、彼らの文章も当然掲載されたにちがいない。彼らが独自の力で財源を獲得しえたならば、当然ながら彼らの文章を優先しただろう。もともと学生生徒が中心になって創刊

した雑誌だったのだ。しかし現実には、依頼原稿の収録でせいいっぱいだったのではないかと思われる。

翌三十七年九月十二日に、及川八楼、吉枝常徳ら学生生徒は『同志社評論』を創刊した。ただし、これは雑誌ではなくて八ページばかりの新聞で、毎月二回発行し広告のページなども設けている。自らの手で、学生生徒の主張や文芸作品を発表する活版刷の機関雑誌をもちたいという欲求を、こうした形で実現したのであろう。その欲求は、こと志とちがって『同志社文学』では果たしえなかったのである。同紙は湯浅吉郎（当時府立図書館長）の助言で、第三号から『同志社新聞』と改題し、三十八年一月から学校の機関紙に委譲された。学生生徒の手では発行できなくなったというよりも、むしろ学校当局がそうした機関紙の必要性を感じるようになったことが大きな要因のようであり、中瀬古六郎教頭らの監督のもとにおきながら、取材や記事の執筆についてはそれまでの学生編集委員にまかせていたようである。『同志社評論』が創刊された年の十二月に『校友会報』は第十五号をもって廃刊になったから、学校も校友会もそれに代るものを必要としていた。『同志社新聞』は三十九年一月に、第十六号から『同志社時報』と再度改題され、大正末期まで月刊で継続刊行されることになる。この新聞と、年に一、二回発行される『女学校期報』が、同志社が明治末期から大正期にかけて刊行をつづけたほとんど唯一の機関紙であった。そして『同志社時報』の寄稿者の顔ぶれをみると、たとえば第二十二号の「夏期附録」など、湯浅半月「歌の話」、高安月郊「彦根懐古」、寒月生「大西洋第二回の航海」、藤井倒扇「零星箚記」、飛天夢弓「解説賦」といった具合で、第二次『同志社文学』の延長ともいいうるものだが、それは、特集号以外の同紙の寄稿者についても指摘しうる。第二次『同志社文学』に寄稿した人たちがしばしば紙面を飾っている。もし継続刊行されていたならばと、惜しまれるゆえんである。そのことと直接的な関係はないが、同志社時報社は『同志社時報』第六十九号（明治43・9・25発行）に「社告」を掲げて、次のように希望を表明し、かつ読者にうったえている。人は変っても、意思はほぼおなじだ。

「何時かはわが同志社時報が同志社学報となりて思想界の一分野を画するの日あらむ。否あらしめざるべからず。吾人はその光栄ある時の一日も早く来らんことを希ふて止まず」

当時の同志社の出版活動の状況が、端的にうかがえることばではないかと思う。『時報』は学術・思想・趣味的な文章もほぼ毎号掲げはした。しかし、それを発行する目的は、学校および校友の情報伝達だった。当然ながら、その目的が同紙の性格を規定していた。

ともあれ、ようやく軌道にのったと思われた段階で、惜しくも廃刊の憂き目にあった第二次『同志社文学』は、あまりに短命であっ

た。そして、筆者の推測がもし多少とも当っているとすれば、皮肉にも、学生生徒が主体となって編集発行する雑誌であったがゆえに、寄稿者の文章は手軽で安易なものが多かった。斯界の注目をひくだけの文章はほとんどなかった。そして、雑誌そのものに個性がなく、また、個性的なものにする編集方針と財政的体勢は、まだ固まってはいなかった。その存在が忘れ去られていても、仕方がないというべきであろう。

① 『同志社五十年史』三三六ページ。

② 『校友会報』第十三号所載「会計報告」、発行部数は不明。第十一号は七五〇冊印刷、四十円八十銭。（同『会報』第十二号）

付

『同志社文学』総目次

第一号（明治36・3・20）

発刊之辞

同志社文学の再興を祝す　和田琳熊

祝詞の代りに（和歌）　橋本奇策

同志社文学の発刊を祝ふ（同）　北里　蘭

漁舟生

論　説

ゾラの劇詩論　SY生

商工立国策と教育　中瀬古六郎

二十世紀に於ける楽劇の使命　PMD

趣味の教育と小説　小池烏川

詞　藻

愛の征矢（訳文）　迷美子

新島先生紀念会の歌（明治三十六年）　高安月郊①

狂胡蝶（新体詩）　むらさき

夏の日（同）　石　嶺

わが春の歌（同）　アントニオ

釈迦牟尼の愛（劇詩）　PMD

泡雪（短詩十首）②　迷の子

春暁鶯語（同五十首）　むらさき

春風　春月（同三首）　漁舟生

梅（同一首）　空山生

かくれ草　田舎の夕（同二首）　秋川漁夫

春（同三首）　琴　月

この花句集（俳句五十首）　梅　村

落花流水（同五首）　蘆荻生

漢詩十首　東衙③

講　話　門田新六

三樹夜話　高安月郊

史籍談　富岡鎌三

雑　録

新島先生を紀念す　岸田美郎

新島先生を懐ふ　石　嶺

自然と人生　河野露花

真乎　一寒生

アダム・スミス氏の伝(一)　岡本生

思出の記　村上木浦

雑　報

。紀元節表誠式。青年会の近状。運動部の不振。普通学校教授の移動。フェルプス氏歓迎会。校友会員より（地方）本会へ入会申込ありたるもの。同志会演説会。本会役員。校友の希望

同志社図書館寄贈及購入書目

注①「目次」のページには題名・氏名とも記載されていない。

②「短詩」とあるのはすべて短歌。

③　本文は「東街」となっている。なお、目次にはあげてないが、「哥林多前書」および「詩篇」から抜粋した文章を、ページの余白に数カ所掲載している。巻末に色紙を一枚綴じ込み同社の「広告」を掲げている。内容は原稿および寄附募集。

第二号（明治36・5・10、ただし未見）

第三号（明治36・10・10）

夕初秋の宮苑に立ちて　飛天夢弓④

支那文明の特徴に就きて（承前）　田村作次郎

江戸城明渡しの真相　厳本善治

紳士として読むへき文学②　高安月郊

ロワンと申す者（訳文）　福田如水

湘南雑詩（漢詩）③　春江漁人

沙翁の悲劇マクベスに就きて　山口金作

所謂役人根性の蔓延　橋本奇峰

四季の択捉　倉沢惣太郎

同志社文学第二号紫瀾生の遠航記を読て同志社漕艇界の健児に寄語す　ス、ナ生

評　論

第一の辞。清見潟に楽劇殿を建つるの辞。我の発見。神たらん為め。人生あって。真の願。人間の本能。何れか吾れ。赤裸々の観念ありや。感応の興　夢弓生

洛北だより

会費として送られし方々

注①「目次」には単に「新体詩」とあるのみ、筆者名も記載なし。以下春江漁人まで筆者名は「目次」に記載なし。

②　これは世界文学の書目である。

③「目次」には単に「雑詩」と記載。

第四号（明治36・12・28）

文学的社会的に維新の革命を観る　高安月郊

宇津保物語に就きて　藤井倒扇

同志社に於る新体詩の起源　湯浅吉郎

西画の新傾向　青柳有美

珂氏倫理学の著者（訳文）　福田如水

論語に於ける孔子の神々　日野真澄

感興録　陵南生

洛北だより

会費を送られし諸君

同志社文学会略則

投稿規則